

# 都市整備における歴史性の認識と計画プロセスに関する研究

—近世城郭を有する盛岡市の現代的課題から—

似内 啓邦

本稿は、近世に起源を有する都市において計画されている各種事業の取組における市民と行政、行政内部、さらに市民間での方向性の合意を得るための困難な状況に着目し、都市整備における「歴史性の認識」と「計画プロセス」を通して地方都市を如何にして整備し改善していくか、その方向性を研究する。

筆者は職務をはじめ文化財行政を通じてまちづくりに関わる機会を得てきた。このことは行政内の主管するセクションで多様な事業が企画され「賑わいの創出」「交流人口の増加」「地域活性化」を題目として様々な事業が計画される中、本来踏まえるべき地域のアイデンティティとしての「守られるべき」地域の個性である歴史性の認識と計画プロセスが欠如していることを痛感したことである。

この課題は、事業を企画した行政内部はもとより、行政と住民、さらには市民内部において計画・事業の方向性の共有を得るための過程のあり方に対する疑問でもある。

関係者の意見を集約した結果としての合意は必要と認識しているが、合意は目的ではなく、あくまでも過程に過ぎず、議論を重ねる過程を経て意識を共有しなければ、辿り着いた結論は共有されないものと判断されることになる。

その課題の解決のためには都市整備における「歴史性」と「計画プロセス」が必要となる。都市を整備するうえでの指標には価値観が影響するが、その価値観に影響を与えているのが歴史性である。

この歴史性はその土地に根付いた固有の要素であり、個性を裏付けていることから、その保護

と活用は都市を開発していく過程で重要な要素となるからである。

また、都市を整備していく過程での計画プロセスは、地域や都市の概略から詳細を探ることから始まる情報の共有、価値観の集約と提示を踏まえた整理、意見のリスクとデメリットを明示したうえででの統合、そして妥協案を探りながらの合意の過程を辿るが、いずれも意思決定において踏まなければならない過程となる。

都市の整備にあたっては、多かれ少なかれ軋轢が生じる。また、その軋轢の解決にあたっての評価・分析においては、第三者的な客観的な視座も重要ではあるが、加えて本稿では筆者自身が直接関わってきた立場と経験を踏まえ、反省しながら施策を分析し、次世代に向けた魅力ある都市とはどうあるべきかを考察した。

盛岡市や全国の都市では近世以降の城下町の構成がそのまま現代の都市に引き継がれているが、歴史性が育んだ気質は受け継がれていることが多い。特に近世に「城下」と言われた地域はそのまま現代の市街地となっており、郊外に新しく造られてきた商店街に暮らす住民が抱く「盛岡」の意識は異なる。

その都市を理解するためには、現代の都市に暮らす市民がその成り立ちを個性ある歴史性として認識することが重要であり、それによって他の都市との違いを改めて認識し誇りとする効果がある。現代社会に生活している我々は、近世の始まりから約440年にもわたって歴史性を保持し継承してきた。

都市の市民はこの誇りの源泉である伝統や文化・文化財などから享受されてきた様々な恩恵を

自分たちの世代で磨り潰すことなく、確実に次世代に継承する責務を負っている。この保守的ともいえる考えの一方で、都市は新しい要素を絶えず吸収しようと絶えず努めている。都市におけるまちづくりにおいては、誇りとする個性を構成する要素を失わないように気を配りながら、新しい要素を吸収するアンテナが必要である。このために現代の都市にあっては近世以降に形成された「歴史性」が深い故に、時として新しい要素の流入にあたって困難な場面にも直面する難しさや課題も抱えており、その課題の一つに様々な事業を展開する際の関係者の課題の認識と協議の過程があり、その結果として方向性の共有が見えてくる。

本稿は全6章の構成とした。第1章では本研究の目的と方法を背景とともに述べたうえで都市の整備における歴史性と計画プロセスの認識の重要性を提示する。第2章では分析する対象地として、方向性の共有の課題が唯一集中している盛岡市の国史跡盛岡城跡周辺の事例の歴史性と事例の課題を述べる。盛岡市は全国の都市の中でも特徴的な歴史性を備えており、歴史性と都市整備・開発を見た際に濃密な事象が生まれているのが盛岡城跡周辺の事業である。その中でも盛岡城跡の歴史的建造物の復元、戦後の引揚者の居住から変質した櫻山神社参道地区の商店街の存続問題、史跡の指定地外ではあるが実質的には曲輪内である芝生広場への公募設置管理制度導入の課題である。この三事例は歴史性と開発の問題を抱える極めて典型的な事例であり、調査対象として最適である。いずれの事例も史跡指定された近世城郭及びその隣接地で計画されたものの、根拠不足や方向性の共有を得る過程での課題から結論が見いだせず課題となっているからである。

第3章では近世城郭の歴史的建造物復元の可能性に関する事例調査として、復元実績のある城郭及び取組中の17都市へのアンケート調査を行い、復元に向けた取組と成果、合意形成並びに機運醸成のあり方を分析した。また、第4章では櫻山神社参道地区は戦後のヤミ市成立から現在までの商店街の歴史性を述べ、現在の店舗経営者

や地元役員等にアンケート調査と聞き取り調査を行って得られた内容からと計画プロセスを分析した。さらに第5章の史跡隣接地への官民連携による開発は、芝生広場の歴史性ととも事業の計画プロセスを把握したうえで、行政が計画した公募設置管理制度の行政内部の議論と手続きを分析した。最終章の第6章では歴史的建造物の意義、商店街の将来像の方向性、史跡隣接地の維持管理のあり方と官民連携を進める弊害と今後の方向性など、事業を進める際の合意を得るための歴史性の認識と計画プロセスの重要性について述べた。特に各事業にみる共通点と相違点では事業主体者と現状の置かれた立場、歴史性の認識、計画プロセスの現状とあるべき姿を提示した。